

華人経済 経営研究

～彼れを知らず己れを知らざれば戦う毎に必ず殆うし～

～特別編～

CMMSの発生と教義の目的(前編)

はじめに

このたびは『香港ボスト』にCMMS紹介の記事をシリーズで掲載していただき本当にありがとうございます。モデレーターや受講者がCMMSについて執筆されており、授業を受けた方々からの反応を披露してくださってきたと思います。今日は視点を変えて、CMMSをつくり世に出した側と動機や期待について語りたいと思います。

香港における「参与観察」

CMMSとは何か。文字通り Chinese Management & Marketing School of Management です。この名称の名付け親は、香港大学商学院国際マーケティング学部長で同院内にある華人経営研究所 (Chinese Management Centre) 原語は「華人管理センター」所長のデビッド・ツェ(謝貴枝)教授です。私が同教授にお会いしたことがCMMS発生の契機となったのですが、CMMSの真髄を知るにはまず香港を知る必要があります。

私は1980年代初頭、ICU大学院で開発経済学専攻、研究分野を中国経済に定めて国際経済学の故・中内恒夫・教授に師事しておりましたが、研究の必要性から後にICU交換留学制度により香港中文大学崇徳書院に院生留学することになりました。これもCMMS発生契機の一つと言えます。中文大学での研究を通じて作成した修士論文をICUに納めてから香港貿易発展局(HKTD)に入局し、中国経済に華人経済を加える形で研究活動を継続し、その傍ら香港貿易発展局で勤務しました。

英国産業革命以降の欧州の変質と国際社会形成の流れ、アジア全体への影響について、それが顕著となったアヘン戦争やその後の中華文明のたどる道程について、この英国植民地・香港が、社会科学で言うところの「参与観察」(研究対象事象の中に入り込んで観察する社会的方法論)を実践した生きた証人のように、英国側と中国側の両方から膨大なアジア史を見ることのできる稀有な場所です。

チャイニーズを総合的に「華人」ととらえ、彼らの多様な伝統文化と長い歴史から導き出された経営思想、心理と行動を体系的に分析し、華人圏や中国への進出に伴う総合的なノウハウを学ぶ合う関西日本香港協会のみならずの基礎となっている「CMMS」について、通常の連載枠(11面参照)とは別に「特別編」として、その創始者の一人である古田茂美さんに、今回から2回にわたってお話を伺います。

あったことが、後日、研究活動に大きな影響を与えていきました。

米や欧州大学のEMBAプログラムによって世界に波及していきました。しかし、1978年アジアでは重要な事件が起こります。故・鄧小平氏の改革開放です。中国の変化を世界はまともに予期できませんでした。北米に留学していた香港、台湾研究者らはいち早く中国経済市場の台頭を予測し、将来、西洋流マネジメント理論だけで中国経済市場を理解することはできないと気づいたと思われまます。西洋式理論を使ながらも、中国人の思考行動を支配する諸価値の注入の重要性を感じていました。

その流れの中で、香港中文大学卒業後カリフォルニア大学バークレー校で経営学博士号取得し、カナダバリティッシュ・コロンビア大学(UBC)で10年教鞭を執ったデビッド・ツェ教授は、香港生まれ香港育ちという環境要因に恵まれ、その経営学・西洋理論を踏まいたしながら、中華思想哲学やそこから醸成される集団価値構造を経営学に注入するという新たな研究方法論を確立していきました。「儒教」研究では北米でも最高学府であると言われ、孔子像がキャンパスに立っているというUBCの影響を受けていることはほぼ確実だと思われまます。デビッド・ツェ教授は香港に戻り、最初は香港城市大学に素早く Chinese Management Centre (華人管理センター) を設置します。そしてその後異動する香港大学でさらに発展させCMMSは同大商学院の中で存在感を確立していきまします。それを推進したのは参加した二人の人物教授で、一人は米国籍経営学組織論で世界に名をはせたケン

90年代に米国でハーバードビジネススクールを中心にして成熟した西洋式マネジメント理論はマイケル・ポーターやドラッカーといった米国理論を中心に世界を席巻していきました。英語が通じる香港やシンガポールにはいち早くそれらが入っていき、まさに米国流グローバルイズムが北

ブリッジ大学のジョン・チャイルド教授、そして香港大学社会学部心理学部の楊中芳教授です。この三人が確立した香港大学CMCでは、拡大する中国市場に効果的に参入するための方法を探索するというマネジメント学の目的をもつて、華人経営学という新たな学術研究分野を提唱し、その学術的方法論の確立を目指してまします。

これは90年代半ばのことです。当時日本では、華人経営などという言葉すら存在せず、香港や台湾ないし東南アジアの華僑財閥とこの国際事業においてもせいぜい邱永漢氏の華僑ビジネス程度の認識しかありませんでした。いわんやマルクス・レーニン主義を標榜した戦後中国経済研究の方法論はマルクス経済学抜きではできず一般的経済学分野の対象でもありませんでした。社会主義から資本主義への移行という旧東欧経済研究の方法もありましたが、西洋でない東洋国家である中国へのアプローチ方法確立には時間がかり、そのために中国の78年の改革開放とその後の市場メカニズムの導入に対応できる学術的対応に日本は遅れたと思われまします。中国経済変化をとらえる研究において日本の大学での理論化が遅れる中、経済界がこぞて手さぐり状態であつた中進出していたのが掲載する予定です。

「華人」とは何か？
デビッド・ツェ教授と二人の教授が94年

【古田茂美(ふるた・しげみ)さん】
香港貿易発展局日本首席代表。国際基督教大学大学院行政学研究科博士前期課程修了(行政学修士MPA)。香港中文大学大学院崇基書院経済学研究所交換留学。神戸大学大学院経営学研究科博士前期課程修了(経営学修士MBA)。立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程修了(国際関係学博士Ph.D)。1982年、香港本局に初日本人スタッフとして入局。大阪事務所所長などを経て、2005年より日本首席代表。



古田茂美さん(右)と香港大学商学院国際マーケティング学部長・華人経営研究センター所長のデビッド・ツェ教授